



TITLE:

古雛文化の起源・変遷・現状：中国南豊と京都を事例として

AUTHOR(S):

丁, 武軍

CITATION:

丁, 武軍. 古雛文化の起源・変遷・現状：中国南豊と京都を事例として.
Dynamis : ことばと文化 2005, 9: 120-132

ISSUE DATE:

2005-10-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/87717>

RIGHT:

[研究会報告 4]

古儺文化の起源・変遷・現状¹

— 中国南豊と京都を事例として —

丁 武軍

0. はじめに

本発表の前半は主に文献的な研究であり、古儺文化の起源や変遷を分析する。後半は南豊や京都の現地調査にもとづき、両地で行われている儺文化を比較考察する。宗教儀式上および民間祭祀上の形態のみならず、その根底に潜んでいる文化の比較を通じて、相互交流の可能性を探ってみたい。

1. 古儺文化の起源

1) 儺文化は紀元前 16～8 世紀の殷、周時代に成立したとされ、その起源はさらに古く、龍山文化、良渚文化時代の玉石器に刻まれた神秘的な紋様にまだ遡ることができる。

2) 原始的な祭である「儺」は、中国の演劇の淵源にもなった。(王国維『宋元戯曲史』、上海古籍出版社、1998 年版、2-3 頁)

① 伝説中の起源

1) 『山海經』・『軒轅本紀』

② 夏・殷・周三代の儺

三代の儺はそれぞれ「夏禡」、「商宄」、「周儺」と言う。

○「微作禡五祀」(『太平御覧』巻 529)。

¹2004 年 11 月 12 日発表。

○「宄」字は殷墟の甲骨文により、徐中舒は「居室の不祥を祓除するの祭」と言う(『甲骨文字典』)。

○「商宄はつまり追儼である」(于省吾『甲骨文釋林』)

○『周礼・夏官』の「方相氏」の条では、「方相氏は掌として、熊皮を蒙り、黄金なる四つの目あり、玄衣と朱裳もて戈を執り、盾を揚げ、百隸を帥いて時に儼し、以って室を索め疫を咬う」とある。

○『礼記・月令』の原文に「季春の月……国に儼を命ず、九門にて磔攘し以って春気を畢しむ」。「仲秋の月……天子乃ち儼して以って秋気を達せしむ」。「季冬の月……有司に命じて大いに儼せしむ。旁にて、磔い、土牛を出して以って、寒気を送る。」とある。(《周禮》嶽麓書社、1989年版、75-85頁)

2. 古儼文化の変遷

① 宮廷から民間へ

○漢の時代には、十二月(季冬)の「大儼」には、「一年の終わりに疫や鬼を追い払い、ゆく年を送り、くる年を迎える(原文：歳終事畢，驅逐疫鬼，因以送陳迎新)」の意味が付与されるようになる。そのために、三月(季春)と八月(仲秋)の二つの「儼」が軽視され、除夜に執り行う「卒歳大儼」がもっぱら行われるようになる。

○民間の儼祭の儀軌は宮廷に比べれば、かなり簡単なものである。しかし、「内」から「外へ」と鬼や疫を追い払う方向は同じであり、鬼を追い払う儀式そのものも共通している。我々はそれが普及していたこと、その賑やかな様子は、わずかに漢代の畫像石、畫像磚に残っている多くの「行儼驅鬼圖」からその片鱗を窺うことができる。

○東晋から南朝にかけては、民間では儼儀の世俗化の傾向がいっそう顕著になった。その甚だしきは、驅疫者が大勢繰り出し一晩中家々を回ってその主人に送迎を強要するまでになった(原文：“結黨連群，通夜達曉，家至門到，責其送迎”)。送迎だけでなく、鬼を追い払ったお礼に酒や肴を振舞うことも強要されたようである。これによってもともと持っていた宗教的な意識が次第に薄れて、神聖、嚴肅な趣も弱まり、鬼を追い払うことを生業とする人も次第に貧しい人、乞食の能くするところとなり、年の瀬の大きな稼ぎとなったようである。

○《隋書・柳・傳》によれば、“・見近代以來，都邑百姓每至正月十五日，作角觥之戲，……窺見京邑，爰及外州，每以正月望夜，充街塞陌，聚戲朋遊。鳴鼓聒天，燎炬照地，人戴獸面，男爲女服，倡優雜技，詭狀異形。以穢褻爲歡娛，用鄙褻爲笑樂，内外共

観、曾不相避。高棚跨路，廣幕陵雲，袷服倩椿，車馬填噎……”（『隋書』卷 62、中華書局 1973 年版、1483-1484 頁。）とあり、唐の時代では、玄宗皇帝がかつて夢の中で悪鬼に魘されたのを、鍾馗が助けてくれたので、呉道子に鍾馗像を描かせて、百官に賜り、もって疫鬼を逐わせたと伝えられている。その影響によって、民間でも鍾馗を雛祭の中に取り入れたのである。このほかに、唐の時代以降、民間でも雛翁、雛母をもって疫を駆除する諸神の首領とするようになった。唐・李綽は《秦中歲時記》のなかで、「毎年を除夜に雛禮をおこない、雛者はみな鬼の格好をして、内の二人の老人がそれぞれ雛翁雛母という。

○宋の時代になると、雛祭はおもに漢代の儀軌を襲いながらも、最後は大勢の雛者が宮門を出て、“埋崇（崇りを埋める）”をもって儀式の幕を閉じるようになる。これは漢の時代の“傳火棄洛水中（松明を伝えて洛水に捨てる）”の儀式から変化したものである。一方、宋の時代は道教を尊びたので、道教の神神、および鍾馗、神荼、鬱壘、竈神、雛翁、雛母等が方相氏と 12 神獣に取って代わって疫鬼を駆除する主役になり、それを扮する人はみな役者（“樂所伶工”）となった。南宋・呉自牧は《夢梁錄・除夜》のなかで、“禁中除夜呈大驅雛儀……以教樂所伶工、裝將軍、符使、判官、鍾馗、六丁、六甲、神兵、五方鬼使、竈君、土地、門戸、神尉等神。自禁中動鼓吹，驅崇東華門外，轉龍池灣，謂之埋崇而教。” 訳：「禁中、除夜に大驅雛を呈す。……教樂所の伶工を以て將軍、符使、判官、鍾馗、六丁、六甲、神兵、五方鬼使、竈君、土地、門戸、神尉などの神に装せしむ。禁中より鼓吹を動かし、崇を驅いて、東華門外に出で龍池灣に転じて（これを“埋崇”と謂う）散ず。」（田仲一成『中国巫系演劇研究』、東京大学出版会、1993 年版、135 頁）。これによって、宋の時代の宮廷雛祭も強い世俗性をもっていたことが窺われよう。これにはもろもろの民間芸能（“百戲”）、歌舞などの娯楽が含まれていたのである。

② 中国から日本へ

○『続日本紀』：「是年、天下諸国疫疾、百姓多死。始作土牛大雛。（是の年、天下の諸国に疫疾ありて、百姓多くしぬ。始めて土牛を作りて大きに雛す。）」（『新日本古典文学大系・続日本紀の一』、青木和夫等校注、岩波書店、平成元年、108～109 頁）

○中国の雛文化が日本に伝わったのは大和時代、文武天皇の慶雲 3 年（706）、唐の中宗神龍 2 年である。

○『新訂増補故實叢書・巻 31』「内裏式・12 月大雛」にも詳細な記事がある。

以上の資料などによって、以下のことが明らかになった。

一、日本の儺の源流は中国にあること。

二、鬼を追い払い、疫を駆逐する儀式的追儺に用いられる「俵子」（子供）、「桃弓葦箭」（桃の木の弓と葦の矢）、「撒豆驅鬼」（豆を撒いて鬼を追い払う）などは、すべて漢の時代の「大儺」の古式に倣ったものであること。（漢・張衡『東京賦』）

○「俵子」（子供）が鬼を追い払うというのは、中国の巫文化においては、「・鬼屬陽，赤色，曰「赤疫」（魘鬼は陽に属し、赤色、「赤疫」と曰う）の考えに基づくもので、同じく陽に属する童巫を以て追い払わなければならないのである。「桃弓葦箭」（桃の木の弓と葦の矢）の由来は、中国の巫文化では、「鬼畏桃」（鬼が桃を畏れる）と信じられ、そのために桃の木の棒で鬼を撃ったり、桃の木の剣で鬼を斬ったり、「桃符」（門に飾るもの）で鬼を鎮めたり、桃の木の矢で鬼を射たり、桃の湯を鬼にかけたり、桃の湯に入ったり、桃の酒を飲んだりして、邪気を避け、鬼を追い払うのである。

○中国の巫文化において、さらに「神荼」、「鬱壘」が度朔山の大きな桃の木の下で葦の縄で悪鬼を縛り付ける言い伝えられ、道教では、後にこれにならって、「懸葦索以禦凶魅」（葦の縄を懸けて凶や鬼を防ぐ）などの方術を創った。そのために、「葦索」（葦の縄）、「葦杖」（葦の杖）、「葦矛」（葦の矛）、「葦矢」（葦の矢）、「葦火」、「葦煙」でも同じように邪気を避け鬼を追い払うためのものとなった。

○「撒豆驅鬼」（豆を撒いて鬼を追い払う）の風習は、中国の巫文化の「赤小豆禳疫法」（赤い小豆で疫を駆除する法）に由来し、漢の時代の大儺礼にもすでに「投赤丸」の儀式があり、この「赤丸」がすなわち「赤い小豆」と考えられる。『樂府雜錄』には、唐の時代の儺の儀式についての記事がある。

○日本では上巳節（雛祭、また女兒節ともいう）に桃花の酒を飲む風習があり、一月十五日に小豆粥を食べる風習もこのような邪気を避ける信仰に関係するものである。日本の民話のなかで、鬼に畏れられた「桃太郎」、「豆太郎」なども「鬼畏桃、豆」（鬼が桃、豆を畏れる）という中国の巫文化の影響によるものと考えられる。

三、儺祭の世俗化にともなって、「儺戲」、「儺舞」が盛んに行われ、「蠟祭」（十二月の行事）から正月一日から十五日にかけて行われる「春祭」（年始の行事）に変容した。日本でもだいたい江戸時代のこのころに、「蠟祭改爲春祭，在立春前一日舉行。（十二月の行事を正月に改め、立春の前日に執り行う）ようになったものと思われる。

○ここで注目したいのは、中日両国の儺文化は、宮廷主導の儺祭から民間主導の演劇へと発展していった点で一致しているが、それぞれの発展の過程と演劇の形態に相違があったことである。その相違が後に中国の儺劇と日本の能楽の特質を形作ったものと

考えられる。

3 中日両国における古雛文化の現状

① 南豊「跳雛」文化の考察

以下「石郵雛」を例に、「南豊雛文化」の現状を考察する。

「石郵郷雛」はまた「跳雛」とも言う。逐疫を中心とする雛班は八人構成である。祭典を主祭する人は「大伯」と言う。祭典は起雛、演雛、搜雛、圓雛という四つの段階に分かれる。その形態と内容を見ると、演雛は「嬉戯歓娛」（娯楽）に近く、つまり演劇と舞踏に近く、起雛、搜雛、圓雛は宗教儀禮に近いものである。

○起雛は巫術の神霊を招くことである。

○演雛は、主な舞劇の形態として「跳雛」の主体をなす。正月一日から十六日までの間、石郵村から週辺の村にかけて、雛舞が繰り上げられる。

○搜雛は古雛の儀式にもっとも近いものである。つまり「索室驅疫」（各家を回って、疫を駆除する）のことである。前日の夜から次の日の朝まで行われる。

○圓雛は「跳雛」の最後を飾る儀式である。神像（雛仮面）は儀軌に従って、雛神廟に返し、雛神に謝意を表して神壇前に卦を投げ、本年の福を祈り、息災を祈願して神意を卜う。

○雛仮面は雛文化の中の重要なものである。一つの仮面は一つの神様だとされ、神を招くことはすなわち仮面を招くことである。そのために仮面は「聖像」といわれる。

○石郵の雛面は全部で十三面あり、すべて柘植の木で造られているが、「開山」だけが二面あり、一面は演雛、搜雛のために使われ、残る一面は廟を守るために「雛神廟」に掲げておく。その顔は赤く、丸い目と広い眉をしていて、牙をむきだして、白い角に炎のような眉をつけ、額には照妖鏡を一枚つける。

② 京都「追雛」文化への考察

A. 節分

節分は春の行事であり、旧暦によれば立春は一年のはじめにあたり、節分はその前日なので、一年の最後の行事となる。

B. 追雛

「追雛」は中国の大雛の行事に倣ったものである。「打鬼」、あるいは「鬼やらい」、

「豆まき」と呼んで、立春の前に行われる。新春に神の降臨と祝福を授かるように、宮室中の悪鬼を追いはらって、宮室を清め、神聖なものにする。

C. 吉田神社の節分祭

吉田神社の節分祭は、三日間にわたって行われる。前日祭は追儺式で、節分当日は火祭で、立春日は雛豆、或いは福豆を振る舞う。

吉田神社の節分祭は京都ではもっとも古く、室町時代に始まるといわれ、京都の一大年中行事である。疫神祭、追儺祭、火爐祭の三つによって構成され、前後三日間にわたって執り行われる。一度中断したのち、大正八年に再興し、今日に至っている。

D. 廬山寺の節分祭

廬山寺の追儺は「元三大師鬼法楽追儺」とも言う。

廬山寺は天慶年間（約十世紀）に建立され、元三大師良源の創始に係り、密宗の寺だったという。明の時代永楽三年（1404年）に第八世明空志玉が足利義満の命を受けて中国に渡った。唯實上人が江西の佛寺廬山の名をもって命名したと伝えられる。寺はもと比叡山にあり、叡山は日本の廬山とも言われ、山の麓に虎溪という小川がある（中国の廬山東林寺の山麓にも虎溪という小川がある）。後に今の場所に移ったという。

4 中日両国における古儺文化の比較

① 実行時期

追儺式の実行時期に注目すると、古代の中国と日本はともに追儺式を大晦日に行っていたことがわかる。しかし現在は南豊の石郵儺は大晦日から正月十七日にかけて、長い期間にわたって行われるのに対して、京都の寺社ではだいたい節分の日に執り行われる。吉田神社は節分の前日の夕べから節分後日の立春までの三日間にわたって行われる。時期に違いはあるものの、旧暦としての正月は、春節とも言われ、元旦と立春とはほとんど一体になっていたことを考えれば、旧暦を廃止した日本では、節分と立春以外、旧暦の正月に近い節句は見あたらない。例えば、平成16年の旧暦元旦は一月二十一日で、旧暦十六日は二月六日です。節分は二月三日なので、立春は二月四日になる。つまり、正月の間に節分と立春が含まれていたわけである。

② 服飾道具

一方、追雛式の服飾道具に目を転じてみると、吉田神社の追雛は古式ゆかしき雛として特に注目される。方相氏は黄金の四つの目をした仮面をかぶり、黒い服と赤い袴を身につけ、背が高くて、威風堂々であるのも古式を伺わせる。俵子（女の子）は4人というのは古式より少ないのである。女の子を登場させるのは隋、唐の時代からの習わしであるが、唐・喬琳『大雛賦』は「俵童丹首，操縵雜弄。舞服驚春，歌聲下鳳」（男女の子供は頭に赤い頭巾をかぶり、手に色とりどりのスカーフのようなものを持って舞い、その服がまた鮮やかであり、歌声が実に美しい）と言う。南宋・劉鏗『観雛』の詩のなかにも「紅裳の姪女、蕉扇を掩い、緑綬の髯翁、蒲剣を握る」と言う句があるくらいである。

女の子が赤い頭巾を被り、黄色の袴を穿き、男の子は黒い冠を被るというのは、漢の時代の男女ともに赤い頭巾を被り、黒装束を身にまとうのと異なるが、道教では「天玄地黄」（天は黒く、地は黄色）の観念があるのと同様であるかもしれない。方相氏が赤い袴をはき、女の子が赤い頭巾をかぶるのと、殿上人が赤いマントを羽織るのは恐らくみな鬼が陽を畏れるためであり、「陽の赤を以て陰の鬼を克つ」のであろう。矛と盾を持つのと、桃の木の弓、葦の矢を用いるのも古式を伝える。廬山寺の追雛「鬼法楽」に仏教、道教の文化的な要素が加わっているうえ、日本的な色彩も吉田神社より濃厚に伺われる。登場する法師等の中にも神道の蓬萊師だけでなく、仏教の僧侶に和服の女性まで加わっているのもそのためであろう。

一方、南豊石郵の跳雛についてみると、開山の姿、服装には方相氏の面影を彷彿させるものはあるが、すっかり変形したものには違いない。しかも俵子（男女の子供）も現れない。雛班の服装も鬼は赤い色を嫌うので花模様の赤色を用いるものの、古式からはかなり遠ざかっている。用いる道具も占卜用の桃の木、杯筭などはあるが、桃の木の弓や葦の矢はすっかり姿を消している。吉田神社の追雛の服装、道具ほど古式を伝えていない。

③ 儀式とその流れ

追雛式の儀式と流れを見てみると、吉田神社の追雛はもともと古式ゆかしきものである。方相氏が俵子を率いて鬼疫を撃つ時、「のう、のう」と大声を上げるその奇声も古風を偲ばせる。それから、火爐祭の火爐は八つの角があり、舞殿の東北、東南、西北、西南の四方には提燈を提げている人が四人立っているのにも道教文化の影が垣間見える。陰陽師も道教文化の影響を受けたものと考えられる。

節分祭の中の火爐祭は、古いお守りを燃やして、無病息災を祈願するのも、古代は鬼

や疫を追い払うのに使った松明を水の中に投げ捨てるのと、同工異曲の妙がある。ただお祓いの方法については上巳節に由来するが、いまや日本の神社仏閣では日常的な行事となっている。儺の儀式の中で、鬼が法堂に乱入し、僧侶等が読経して鬼を退治して、鬼が負けて退散するという一幕には仏教の力だけでなく、宋の時代以来儺文化に及ぼした仏教の影響を感じさせる一方で、家中鬼を探して回る古式を偲ばせる。

廬山寺と吉田神社の追儺儀式を通じていえるのは、宗教活動の儀軌を重んずることは日本の儺文化の特色といえる。両者とも陰陽師と蓬萊師の中心的な役割を強調することや、吉田神社の追儺の儀式に行ったお祓いと廬山寺の追儺の前に観衆のために息災祈福の「鬼の御加持」も同じである。一方、南豊の石郵跳儺のなかには、起儺・搜儺・圓儺は古風を残しているものの、主宰者が「大伯」となり、陰陽師はわずかに儺神の安置場所を定め、儺の仮面のお祓いをし、儺神廟の建設日を選択するような機能だけである。

④ 風習と伝流

追儺式の風習と伝流について見ると、儺文化の風習として豆撒き（鬼やらい）を行い悪鬼を追い払い、福を祈るほかに、いわしを焼いたり、いわしの頭を柊の小枝に刺したりすることが挙げられる。

豆を撒いて鬼を追い払う方法は、西周の儺の儀式に遡る。『周禮註疏・春官』によれば、「乃舍萌四方，以贈惡夢。遂令始儺驅疫。」とあり、「舍萌」は鄭玄の注に従えば、すなわち菜芽を撒くことであり、鬼や疫をなだめたり、警告したりする意味が込められていると考えられる。後に赤い小豆や五穀を撒いて鬼や疫を追い払うようになったのである。蓬萊豆と福餅は日本的なものであるが、中国の巫文化の中にも「赤小豆禳疫法」（赤い小豆で疫病を直す法）があり、漢の時代の大儺には、「投赤丸」（赤い豆を投げる）の儀式があり、この赤丸はすなわち赤い小豆のことに違いない。これはまた儺豆ともいう。儺豆の使い方は吞服、まき散らす、吞服・まき散らす兼用の三つがある。葛洪は『肘後方』の中で、次のように言っている。「吞服在水井中泡過的赤小豆即可辟疫」（井戸の中につけておいた赤い小豆を吞めば疫を避けることができる）、「正月七日，新布囊盛赤小豆置井中三日，取出，男性七枚，女性二七枚，竟年無病。」（正月七日に、新しい布の袋に赤い小豆を入れて井戸の中に三日間浸け置いた後、取り出して、男性は七個、女性は十四個吞めば、一年中病氣しない）。宗懐も『荆楚歲時記』のなかで、「冬至日，量日影，作赤豆粥以禳疫。」（冬至の日に、日の影を量り、赤い小豆の粥を作って食べれば疫を避けることができる）と言っている。杜工瞻注によれば、「共工氏有不才子，以冬至日死，爲疫鬼，畏赤小豆。」（共工氏には親不孝の子供がいて、冬至の日に死んだの

で、疫の鬼となった。赤い小豆を畏れる) という。「藥王」と称された唐の時代の医者孫思邈もこれを堅く信じているようで、その『千金方・辟瘟』のなかで、赤い小豆を呑んで疫を避けるための処方をつくつも載せている。よって福豆も由来のあることがわかる。跳儺の間、南豊の石郵の家家では豆を炒る。これを「發煙」という。すなわち「豆子豆孫，煙火不斷」（子孫繁栄）の意である。

旁礫は古代中国の重要な儺の儀軌の一つである。それは城の四方の門前に、犠牲を供える風習である。太古の昔には犬が悪を鎮め邪気を避ける力があると信じられ、『説文解字』では「狗，叩也。叩氣吠以守。」と解される。犬は門番をして家を守るのと、犬の血が陽に属するので、鬼から人を守るとされた。古語の「狗血淋頭」もその意を伝えている。後になって犬の肢体を引き裂いて城の四方の門に掲げて鬼や疫を追い払う方法から他の動物を用いる方法に変わって、儺の儀式になったのである。今は犬だけでなく他の動物を用いた「礫牲」も行われませんが、いわしを焼いてその匂いで鬼を退治することや、柊の枝に鯛を刺す風習には、まだわずかながら古式の儺の儀式の影が求められるだけである。

⑤ 形態と対象

追儺式の形態と対象に注目すると、以下の三つの特徴が見られる。

(1) 日本の追儺は儺文化の古式ゆかしき儀軌を残している。大儺の中の散樂が「猿樂」と「田樂」をへて「能」に高められていくにいたって、追儺の儀軌から離脱して、古典芸能の代表になったものである。一方、中国の儺文化にも「儺戯」、「儺舞」のような形で古典劇の源流をなしていたが、世俗的な雰囲気は濃厚である。南豊の儺文化の場合「搜儺」の部分には古式の儺文化の儀軌を多く残している化石的な存在である。

(2) 日本の追儺の鬼は形を持つ有形のものであるが、中国の大儺の中の鬼は形のないものである。これは恐らく両国の神や鬼に対する意識の違いによるものと考えられる。中国では古くは人間の肉体と精神は二元論的に捉えられ、「人が死して鬼と曰う」、「鬼は歸なり。精神は天に歸し、肉體は土に歸す。」（『韓詩外傳』）そして、靈魂は「氣」の一種として捉えられた。「天氣は魂なり、地氣は魄なり。」（『淮南子』）といわれる。更に夢は魂の一時的に抜け出した状態を言い、魂が肉体から抜け出して帰らないものがすなわち「鬼」であった。例えば『莊子』に「人の生、氣の聚まるなり。聚れば則ち生となし、散じて鬼となる」と言われる。要するに「鬼」は形を持たないものなのである。一方『日本風俗史事典』『追儺』によれば、日本でももともとは中国大陆と同じく鬼は形のないものであったが、平安末期から形のあるものになったが、その原因は不明

であるが、神霊に対する意識や観念に関係があると指摘している。

(3) 中国の大儺のなかでは鬼は悪鬼であり、日本の追儺の中の鬼は亡霊、亡き人の魂と言われる。そのために、中国では大儺の儀式の中には方相氏が十二の神獣を率いて鬼や疫を追い払う際もたいへん勇ましく、鬼気迫るものを感じさせる。対して、吉田神社の鬼を追い払う陰陽師、方相氏、廬山寺の蓬萊師、方相氏はたいへん穏やかな振る舞いをする。中国の大儺では、たとえば『十二神獸吃鬼歌』には「凡使十二神追兇惡，赫汝軀，拉汝肝，節解汝肌肉，抽汝肺腸，汝不急去，後者爲糧」（すべての十二神は悪鬼や凶を追う、汝の身を八つ裂きにし、汝の肝をひしぎ、汝の肌の肉をばらばらにし、汝の肝や腸をえぐり出すぞ、汝、速やかに逃げなければ、遅れるものは食物にするぞ。『十二神獸は鬼を食う歌』の訳文は諏訪春雄『日中比較芸能史』、吉川弘文館、平成6年、123～124頁による）のような恐嚇の言葉に対して、日本の追儺の中の陰陽師や蓬萊師が読み上げるような檄文はたとえば「轉禍爲福、息災延壽。除災招福、善願成就。……皆令満足。」などのように、願いを込めたものである。

参考文献:

- 袁 珂譯注『山海系經全譯』、貴州人民出版社、1991 年版。
- 王国維『宋元戲曲史』、上海古籍出版社、1998 年版。
- 高国藩『中国巫術史』、上海三聯書店、1999 年版。
- 林 河『古儺尋蹤』、湖南美術出版社、1997 年版。
- 林 河『中国巫儺史』、花城出版社、2001 年版。
- 周華斌『中国戲劇史新論』、北京廣播学院出版社、2003 年版。
- 高有鵬『中国廟会文化』、上海古籍出版社、1999 年版。
- 吳爾泰『民俗民芸論集』、中華文化出版社、1993 年版。
- 章軍華『臨川儺文化』、江西高校出版社、2001 年版。
- 丁武軍『文化與旅游』、高等教育出版社、2004 年版。
- 田仲一成『中国巫系演劇研究』、東京大学出版会、1993 年版。
- 田仲一成『中国演劇史』、東京大学出版会、1998 年版。
- 諏訪春雄『日中比較芸能史』、吉川弘文館、1994 年版。
- 藤原公任『改訂・補故実叢書』巻 31「内裏式」、明治図書出版、1993 年版。
- 細川潤次郎『古事類苑』「歳時部」、神宮司廳、明治 41 年版。
- 村瀬栲亭『杣苑日涉』巻 7「民間歳節・下」、数庫堂、安政四年丁巳春補刻本。

質疑応答

李（コメンテータ）： たいへん興味深い発表、ありがとうございます。実はこの発表原稿の準備段階から何回も読ませていただいております、内容的に新鮮な感じを受けた。全部ご発表いただけなかったことは残念であるが、付録の資料をご覧いただければこの研究の全容を窺うことができるので、ぜひご参照ください。

三谷： 吉田神社の節分祭のどのような点が古式に近いと考えられるのか。

丁： 儀軌つまり儀式の進行が昔の中国の式に非常に近い。漢の時代の儀式は今の中国にはもう残っていないが、吉田神社ではほぼそれと同じ儀式が執り行われていた。廬山寺ではどちらかというと仏教だけでなく道教的な陰陽師が出ている点で異なる。実際、道教的な要素は宋の時代からで、漢の時代にはそれがなかった。

李： 儀式の中で「のう のう のう」という部分があるが、これは実は「儺」の発音であるということが興味深い。「儺」は二声、núo であり、日本語に直すと漢読みでは「な一」、現代語でも「のお」、まさに núo である。

三谷： 儺の文化というのは、ある種の悪魔祓い、魔よけの様々な形式として実現されるようだが「儺」とはそもそもどのようなものなのか。

丁： 中国の古文化（古い民族的な底辺の文化）にはおよそ次のロウ祭、儺祭、フ祭の3つがある。臘祭とは旧暦十二月の祭りのことで、儺祭とは悪霊を追い払い無病息災を祈る祭りである。

三谷： すると、そうした古文化の祭りが年中行事などに取り込まれた、その全体をさして儺文化というのか。

丁： 年中行事だけでなく、日本のお能は追儺の儀式の中の仮面、曲目、振る舞いと関係している。儺というのはお能の語源ではないかと思って、調べてみたところ、これまでのところよく言われているのは芸能の能、能力の有無からお能をさすようになったという説が有力のようだ。

三谷： しかしそれは後から考えられた説明という可能性はないのか。

李： その可能性が高い。六頁の圓儺というのは 最後の四つ、儺のほうの追儺の儀式は搜儺と圓儺、搜儺というのは探す（各家々を回って鬼はいませんか、と探し、追い払ってくれる）、圓儺は仮面を元に戻す、という意味である。仮面そもそもが神であり、

それをお祭りの間だけ取り出して使用し、そして鬼を追い払ったあとそれをもとの場所に返すのである。返却は儼神廟になされ、漢の時代にはその仮面のことを「儼」と読んでいた。つまり、仮面そのものが儼なのである。

三谷： 仮面のことを「儼」といつていたのか。

李： 丁先生の調べでそれと分かっている。日本のお能というのはこれから来ているのではないだろうか。追儼の儀式の中で儼、吉田神社の中では「ノウ」と言われている。

内藤： 吉田神社の能はどのように発音されているのか。

丁： 力強くノウ、と発音されている。中国でも儼（ノウ）と言う。二頁に挙げた故実叢書に方相氏が「のう のう のう」、と声を上げると書かれている。

三谷： それは日本に追儼の儀式が入ってきた頃の記述なのか。

丁： これは内裏式なので古いと思われる。追儼の儀式が日本に入ってきたのは室町の頃だろう。

三谷： 吉田神社が室町の頃に建てられていることを考えると、中国から伝えられたものがそのまま今日まで残っているという説は十分理解できる。もともと鬼は精神的なもので形のないものであったのが、今日形のあるものとしてとらえられているのは面白い。

日本の鬼というと昔話に出てくる角のある鬼の姿が一般的だが、本来は姿のないものと理解してよいのだろうか。

丁： 鬼^{おに}という言葉が一般に広がるのと平行して、鬼のイメージが日本独自の姿をもつものとなって広がったのだろう。鬼気迫る、というように「鬼^{おに}」といたらむしろ、本来の中国的な形のないものを指すのかもしれない。中国の鬼に角があるという話は聞かない。

三谷： たとえば西遊記に出てくる「鬼」みたいな魑魅魍魎の類は何なのか。

丁： 西遊記に出てくるのは鬼ではなく妖怪である。西遊記には仏教のいろいろな悪魔の影響があるのだろう、あれは中国的な鬼ではない。

李： 形のない鬼からかたちのある鬼へ、平安末期に変化したというのはおもしろい。吉田神道の中に道教的な要素を少なからず取り入れられたことの一例に、吉田神社の八角の建造物がある。

三谷: 桃が雛の儀式に深くかかわっていることも今日知った。桃といえば桃太郎も中国から伝わったのだろうか。

李: 桃太郎そのものはどうか知りませんが、果物のなかから子供が生まれるというストーリーは中国にもある。桃の木にまつわる風習は少なくとも日中の間で共通したものようだ。それから、道教の仙人は桃の木の下で葦を漣り、それで鬼を縛る縄を作っていたといわれる。これがひょっとするとしめなわと関係があるのではないかと考えられる。縄はそこに置いておくと様々なご利益があり、神聖なもののしるしになったのではないか。日本では雛の文化の中からお能や田楽、猿楽など、様々なものが生み出されてきた。中国ではいわゆる宋の時代、元の時代の劇の原形や様々なものが雛の仮面劇から演劇化し、戯曲化したものと見て間違いだろう。人によっては中国の元曲と能の間に影響関係があるのではないかとする人もいる。詳しいことは解らないが、元の時代に曲と能の直接の関係と言うより、雛の文化の中から芸能として仮面を使うものと使わないものが出てきたのではないか。丁先生は先日巖島神社に行かれ中国の雛の文化の劇と日本の古典芸能との関係を示す手がかりを発見された。

丁: 北齊の時代に蘭陵王と言う王子がおり、大変美男子で、戦場に行ってもこの美しい顔では誰も恐れないだろう、と言うことで仮面をつけて戦に行った。その舞楽を巖島神社では今でも仮面をつけてやっている。仮面文化と言うと雛の文化の中から舞楽とか劇とか、中国との関係を窺わせるものがあちこちにあるはず。

李: 丁先生がそこで発見されたように、これも仮面を使っているというのは非常に興味深い。

内藤: 丁先生は日本でのそうしたフィールド先はどのように決定されているのか。

丁: 巖島神社は有名だからと言うことで行ってみて偶然発見した。あそこでは定期的に舞楽を行っているようだ。

内藤: さらにあちこちフィールドされたらきっとまた何か発見があるだろう。

李: 丁先生のご研究が明らかにされたように、雛の文化は、どのようなルートを通ってかは分からないが、中世の頃に日本に伝わり、定着した。現代の中国では雛の文化は完全に失われてしまっているが、日本ではさまざまな伝統芸能や行事、しきたりの中に、何らかの形で雛の文化につながる影響が残っているようだ。非常におもしろい研究だと思う。